

ポール・クロードル関大講演再考

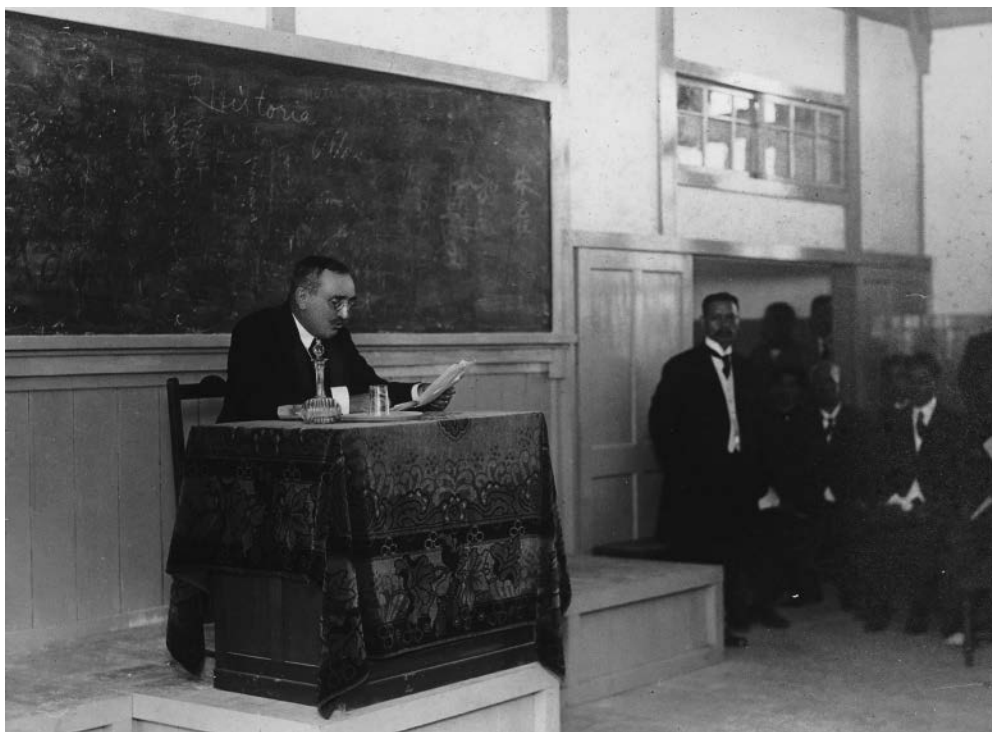
奥 純

この度、幸運にも、ポール・クロードルが100年前に関大で行なった講演の原稿を拝読する機会に恵まれた。当時の関西大学学報局発行の『千里山学報』第2号（1922年7月15日発行）に、その原稿の全文と、講演会を企画し通訳を務めた宮島綱男（当時関西大学専務理事）による講演の摘録が掲載されている。現在でもフランス語の原稿を、辞書を引いて読もうとする人は少ないだろうから、クロードル講演会の内容は、普通、宮島の摘録を通して理解されていると思われる。しかし、原稿を読んでも、摘録とはかなり印象が異なるのである。おそらく、この摘録には、宮島の強い思いが込められているのだろうし、一方、原稿にはクロードルが駐日大使の役目として伝えなければならなかった内容も含まれている。実は、この二つの意図をひとまず括弧に入れた時、クロードルが学生たちに伝えたかった最も重要なメッセージが浮かび上がってくると思われるのである。そこで、大学昇格100周年を迎えようとする今、改めてこの講演会の解題を試みたい。

講演会が行われた経緯については、本学名誉教授浜本隆志先生が「ポ

ール・クロードルと関大ゆかりの人びと」（『関西大学年史紀要』第21号、2012年3月）で詳しく述べられているが、そこにまとめられたい年譜によれば、宮島綱男が早稲田大学を辞した後、関西大学に専務理事兼教授として着任したのは1921年のことであり、クロードルの講演会は宮島の企画により、翌年の1922年5月27日に開催されている。大学昇格を記念して開催されたこの講演会は、これ以降続く一連の「学の実化」講演会の一回目となったものである。宮島は教授としては統計学を担当していたが、フランスへの留学経験がありフランス語に堪能であった。講演会当日は土曜日で、関西大学が当時の文部省から大学昇格を認可されたのはその九日後の6月5日のことである。当時会場となった千里山学舎の周囲はまだ野原で、そこに校舎がポツンと建っているような状態だったという。『千里山学報』の記録によれば、講演会は午後2時から、数百人の学生や来賓を集め、フランスの国歌演奏と関西大学総理事山岡順太郎の歓迎の辞をもって始まった。講演会の通訳を務めたのも宮島自身であった。

さて、宮島の講演会摘録を読むと、その内容は次のように要約でき



学の実化講座で講演するポール・クローデル

ると思われる。「ここは法律という正義を学ぶ場所であるが、フランス語は正義を語るのに最も適した言葉である。フランスは文化的にも産業においても優れた大国であり、フランス語は重要な言葉として世界中で話されている。フランス語は思想を表現し議論を行うのに適した言葉であるので、国際的な相互理解が必須となっている今日、フランス語を是非学んでほしい。」となり、おそらくこれが多くの人が摘録を讀んで得られるクローデルからのメッセージの概要であると思うが、しかし、講演の原文とは微妙にニュアンスが違うのである。

原文との微妙な差異は、特に摘録の冒頭部分に感じられるが、大きく二点をあげることができる。まず、摘録では特に冒頭のパラグラフにおいて「正義」が強調されていることである。摘録では三度「正義」が繰り返されているが、いずれの場合も原文と読み合わせると多少の違和感がある。まず摘録の三番目の段落の始めに出てくる「御校は正義法律を学ぶ場所であって」の行であるが、原文では *dire le droit* という表現が用いられている。これは和訳するのに難しい表現ではあるが、おそらく「法を説く」といった意味であろうと思われる。もっともローマ時代から現代に至るまで、世界中の法廷で正義が論じられてきたわけだから、そこに正義の意味もないわけではないのだから、そうだとすると、少なくとも直接に「ここは正義を学ぶ場所だ」と言っているのではなく、それよりは、正義を「論じる」ことを学ぶ場所だと言う意味に近く、要するに、ここは法科大学だと言っているのである。そして、何よりも宮島訳の特徴が表れているのが、冒頭から二番目に「正義」が出てくる行であり、「正義なる言葉と法律なる言葉は同義語であってこの意味が最もよく表れているのがフランス語である」

となっているが、原文では「フランス語においては、justesse est presque synonyme de justiceである」となっている。宮島は、おそらくこのjustesseを「正義」と訳しjusticeを「法律」と訳しているか、あるいはその逆かもしれないが、しかし、何れにせよこの場合、justesseは「正義」の意味でも「法律」の意味でもなく「正確さ」という意味である。また、文の最後にあるjusticeは、これこそ「正義」の意味で使われていて、つまり、文脈に沿って原文を訳せば「フランス語においては言葉の正確さというものがほとんど正義の同義語になっている」となる。クローデルは、フランス語では、言葉を正確に使うことがそれほど重要なことなのだと言っている。だからこそ、フランス語が「法を説く」のに適した言葉だと思ふとクローデルは言うのである。また、原文では、おそらくjustesse (ジュステス) と justice (ジュステイス) と言う二つの言葉の発音が「ほとんど」同じという音の効果が、演説の際に韻を踏む役割も果たしていることも付け加えておきたい。そして三番目に、この次の段落の始めに出てくる「正義に関する観念(…)を吸収維持することに於て最も活動的なる大大阪」の行であるが、原文にあるjusticeが「正義」と訳されている。この場合、justiceという単語自体には確かにその意味があるが、しかし、文脈から考えるとこの場合「正義」よりはむしろ「公正さ」と訳した方が適切であると思われるのである。つまり、クローデルは「大阪という交易活動の活発な都市においては、人々は常に公正さという観念を維持することを求められているのだ」と言っているのである。

以上に見てきたように、宮島の摘録では正義が強調されているのだが、実際、カトリックの敬虔な信者であったクローデルにとって、絶

対的な正義などというものは神のみぞ知るものであって、人間にとっては、できる限り普遍妥当性を持つ判断がどの辺りにあるのか、常に思考し議論し探求し続けなければならないものであったと思われる。つまり、クローデルが正義を連呼することはほとんどあり得ないことなのである。

宮島の摘録とクローデルの原文にある第二の相違点は、フランス語を学ぶ実利性が強調されていることである。クローデルは駐日フランス大使であり、情宣を行うことを任務としている。しかし、大文学者であったクローデルは、宣伝はあまり好きではなかったようで、講演の文章の所々でその雰囲気伝わってくる。たとえば、摘録の六番目の段落の終わりあたりから始まるフランス語およびフランス語の宣伝であるが、クローデルは、フランス語を学ぶ実際的な利点については長くは述べないと言つて話を端折っている。おそらく、講演会において、クローデルは、これらの宣伝項目については、あまり強調せず読み上げる程度で済ませたのではないかと思われる。しかし、摘録においては、フランス語はどれほど多くの人に話されているか、フランスはどれほど大きな工業国であるか、など、宣伝項目の全てが1から5までの番号を付されて列挙され、強調されているのである。

以上、宮島の摘録と原文との相違点を見てきた。摘録には、誤訳のように思われる箇所もあるのだが、それはおそらく宮島が原文を意識的に改変したのだと思われるのである。この摘録は、摘録と言いつつほとんど全訳に近い。それでもなおそれが摘録であるとする所に、この文章に自分の主張を盛り込みたかった宮島の強い意思を感じるのである。宮島は、フランス人ボワソナードの弟子たちが創設し、大学

昇格が間近に迫った関西大学に着任したばかりである。宮島は、帝国憲法下にあつて、法律が絶対的な正義を具現しているという考えが、おそらく今よりはるかに一般的であつたと思われる時代にあつて、学生たちに、これから大学に昇格して皆で正義を学ぶのだと檄を飛ばすとともに、関西大学とフランスとの関係の歴史的正当性を強調し、フランス語を学ぶ必要性を主張して学内にフランス語教育を定着させ、よつてフランス事情に通じフランス語に堪能な自らの立場を強固にして大学運営に精力的に取り組もうとしたのだと思われるのである。

さて、ではポール・クローデルの思いとはどのようなものであつたか。先に述べたように、クローデルは宣伝はあまり好きではなかつたようだが、ことフランス語については別である。クローデルはフランスの大家作家でありフランス語に深い愛着を持っているので、人にフランス語の習得を勧めるのはごく当然の成り行きであつたと思われる。駐日大使在任中に、京都にあつた関西日仏学館の設立をフランス本国に提言するなど、クローデルは日本におけるフランス語フランス文化の普及に精力的に取り組んでいるが、クローデルにとつて、言語文化の普及を目的とした活動は、大使として最も素直に自信を持って取り組むことのできる活動であつたと思われる。したがつて、聴衆の中でフランス語に興味のない人はその分割り引いて聞いてもらつて構わないのである。クローデル自身、講演の最後の方で、思考能力を高めるためにはフランス語を学ぶべきだと言いたいところを少し抑えて、「フランス語が不可欠とは言わないが」と遠慮がちに述べており、勧めが強引にならないように気を遣っている。そうであれば、フランス語を学べということよりも、何のために学んでほしいのか、その理由に耳

を傾けるべきではないか。

例えば、講演の冒頭でクローデルは、フランス語は正確さを重視する言語なので、法を説くのに適した言語なのだと言つてフランス語の学習を勧めているのだが、この場合、正確な言葉遣いを心がけなさいという主たるメッセージを読み取ればそれでよく、それができれば何語であつても構わないのである。フランス語は明晰な言葉だとは昔からよく言われてきた事だが、それは古来、歴史に残る偉大なフランスの思想家たちが綺羅星のごとく登場し活躍してきた実績によるのであつて、言葉自体が明晰かどうかを実証的に検証する手立てはない。実際、使う人の頭の中が明晰でなければその言葉が明晰になるはずもないのである。それでもなおフランス語が最適だと言うクローデルの主張については、自国の言語と文化を深く愛するクローデルの熱い心を想い、敬意を持つて拝聴しておくべきであろう。講演をこのような読み取り方で理解するなら、クローデルが聴衆に伝えたかつたメッセージは、実はごくシンプルなのであつたことがわかるのである。

まず始めに、言語の壁を超えて様々な立場の人々と議論する習慣を身につけなさいということ。このメッセージは、創造的な仕事をするためには自国の文化の理解と国際理解が必要だと述べている部分から読み取ることができる。次に、主観を排し客観性を心がけなさいということ。これは、講演の始めの方で、フランス語は観念を見えるもののように表現する言葉だと言つているところや、フランスの理想の書物は、書物が自動的に語り、作者は忘れ去られてそこに語られた思想しか聞こえてこないような書物だと述べているところから読み取ることができるといふ。つまり、自分の考えを語る場合には、予断や偏見を排し

て、誰もがそう思えるほどの客観性を心がけなさいということである。また、弁論を行うには、主たるテーマとそれを支える副次的なテーマ群を構成する優れた編集能力を磨きなさいということ。これは、フランス人は議論を自然な態度にしていると述べているところや、文を構成することを学ばなければならないと述べているところから読み取ることが出来る。そして、文を構成することや弁論を編集する能力を磨くということは、取りも直さず思考能力を鍛えなさいということに他ならない。これこそが、学生たちに向けたクロードルからの最も重要なメッセージであり、法律専門学校から大学へと昇格し、これから大学生として学ぶことになる当時の学生たちにぜひ聞き届けておいてもらいたかったメッセージであると思われるのである。

クロードルは述べる。だから、世界の偉大な文明が全て基礎教養教育と中でも特に表現力を重視してきたのは当然のことなのだ。専門知識はもちろん必要だが、その有効範囲はその領域内に留まり、また時代とともに廃れてゆく。専門領域の枠組みを超え、廃れた専門領域を常に更新できる思考力こそ重要なのであって、大学教育の根幹はその思考力の養成にあるのだ。君たちは、指示されたことを行うだけの歯車であってはならない。自ら主体的に考える人になってほしい。このようにクロードルは言っているのである。この後すぐに関西大学に文学科が創設されており、この時のクロードルの提言が設立の大きな契機になったと言われているが、クロードルは、文学のみならず、より広く人文学を大学で教える重要性を伝えたかったのだと思われるのである。と言うのも、フランスでは、文学はほとんど人文学の同義語であると言えるほど幅の広い概念だからである。

ところで、実は、クロードルの講演原稿は、関西大学の講演会のためだけに作成されたものではない。クロードルは、関西大学の講演会の三日前、5月23日に京都帝国大学で仏文科の学生の前で講演を行っており、二つの講演は冒頭部分がそれぞれの地域に合わせた内容になっているものの、本文の内容はほとんど変わらない。したがって、このクロードルの講演は関西大学の学生のみならず、日本の学生一般に対して語られたものであると考えるのが適切だと思われるが、しかし、その内容から見ても、クロードルの講演会は、一連の「学の実化」講演会の皮切りに真にふさわしいものになったことがわかるだろう。つまり、実利的で皮相な「今、役に立つ」学問をしようということではなく、世界と創造的に関わり、世界を常に更新し続ける原動力である思考能力を身につけてほしいということであったが、当時の社会的な状況を考えれば、クロードルのメッセージが学生たちに十分に伝わったかどうかは甚だ疑わしい。これ以後、日本はファシズムの波に飲み込まれ第二次世界大戦へと向かっていったことを思えば、この時、日本中がクロードルのメッセージを理解しておいてくれればと残念に思うのである。大学昇格100周年を迎える今日、改めてクロードルの言葉に耳を傾けようではないか。

（本稿作成にあたっては、法学部の市原靖久教授から重要な資料を多数ご教示いただき、また、講演原稿の訳出にあたっては、文学部の友谷知己教授から貴重なアドバイスをいただきました。厚く御礼申し上げます。）

駐日フランス大使ポール・クローデル氏講演

演題：「フランス語について」

於：関西大学千里山学舎

日時：1922年5月27日（土）

皆さま、ただいま関西大学学長からいただきました親切なお言葉と、フランスの伝統が受け継がれているこの場所で皆さまと言葉を交わす機会をいただきましたことに感謝申し上げます。このような機会に恵まれましたのは、決して偶然によるものではなく、同じ学問領域における研究の実践と、ローマの法廷の伝統を継承するこの高等教育機関の機能によるものであり、この学校において、皆さまは、適切な表現を用いれば、「法を説く」ことを学ばれているのですが、実は、フランス語ほど法を説くのに適した言語はないのであります。というのも、フランス語においては、表現の正しさというものがほとんど正義の同義語になっているとも言えるからであります。

さて、皆さま。目覚ましい交易活動が行われているこの大阪という巨大な都会において、公正さについての真摯で調和のとれた観念を維持することを求められている皆さまに、とりわけ理性と探求と判断の言語として優れたこの言語について、今申し上げましたとおり、訴訟や書式、判決文を認めるのに最も優れたこの言語についてお話をするのでなければ、一体何をお話すれば良いのでしょうか。また、ここにお集まりのお初にお目にかかる皆さま方に、私と皆さまを隔てている障壁を打ち壊すことについて、つまり、一度その言葉を聞けば自分の

知性の耳をふさぐことが難しくなってしまうような私どもの言葉の誘いについてお話するのではありません、それ以上に力強いテーマなど他にあるのでしょうか。したがって、私はここでフランス語についてお話しをさせていただくかと思うのであります。フランス語は、この地でそれをただ教えようとしただけではなく、それを学ぶ気持を育てようと人生を捧げた素晴らしい先達の努力にも関わらず、皆さまの間に、まだ十分に研究され広がってはおられません。私は、現代社会に生きる教養ある市民にとって、ダンテの表現に従えば「見えるように話す」ことを知ることから生じるフランス語の実際的で普遍的な利点について手短にお話させていただくかと思えます。フランス語では、私どもの知性から見ればごく当然のように思える方法によって、観念を見えるもののように表現できるのであります。

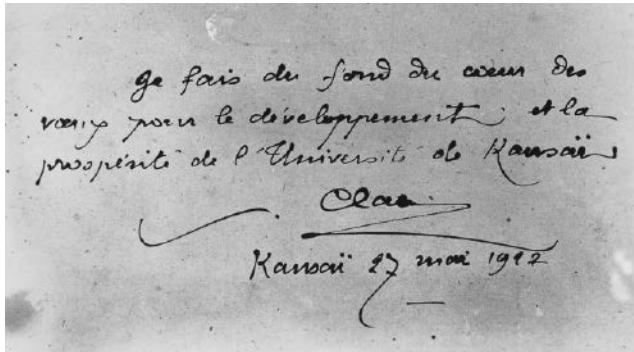
その実際的な利点についてはあまり長く述べるつもりはありません。フランス本土は人口4千万人の広くて力強い国で、国外でも、1千5百万人のヨーロッパ人やアメリカ人がフランス語を話し、植民地には1億5千万の人口があることのみ思い起こして頂ければと思えます。この植民地のうちの素晴らしい領土があなたの方の国の近くにあって、そこでは私どもの言葉が熱心に学ばれております。今申し上げているのはフランス領インドシナのことですが、彼の地では近々フランス語が国の第二言語になろうとしております。さらに、ご存知のように、フランスは芸術や高級品の生産をいわば占有しており、いくつかの産業は世界の最先端にあり、日本の皆さまの興味をとりわけ惹きつける水力に関する産業は、私どもほど研究を進めている国はありませんし、フランスは国土にヨーロッパの鉄鉱石のほとんど全てを保有しており

それらの言語はただ単に観念を表現しているのではなく、その観念がある限定された人間のタイプに引き起こす生理的反應をも表現しているのです。例えば、私は英語に対して、そのエネルギーや、鋭く屈託のない雰囲気や、素早くシンプルに物事を捉えるやり方に、大いなる賞賛の念を持っております。英語は行動の言語ですが、熟考のための言語ではありません。英語の言葉は観念ではなく行為を表現しているのです。英語を話すためには、英国人になって、ある種の精神的態度に馴染まなくてはなりません。そこには、ただそれだけが表現されているような観念はもはや存在せず、何か私たちの前に三次元の立体的な目的のためにそれを使う誰かがそこにいるのです。これとは逆に、フランス語においては、観念が最も客観的に表現されるように、すべてがその表現を支えております。文章は、自律的な生命を与えられた文法的な個人なのです。昔から、フランスにおいて良い書物の理想とは、いわばその書物が自動的に語り、作者は忘れ去られてそこに語られた思想しか聞こえてこないような書物でした。これが、極めて多様な民族に属する人々が、自分の考えに一般的で決定的な形を与えようと思つた時、フランス語で書くことを望んだその理由です。ブルネット・ラティーニからプロシアのフレデリック二世やイギリス人のハミルトンやベックフォードを経てダヌンティオ氏に至るまで、フランス語を書いた外国人作家たちのリストは長く輝かしいものであり、まだまだ閉じられそうにありません。

つまり、今私が申し上げたことからお分かりになるように、フランス語が普遍的な補佐的言語となる資格を持つているとすれば、それは

フランス語が、思想の表現というとりわけデリケートな役割のために最も適切で最も巧妙に組み立てられているからであり、まさにそれが巧緻な言葉であるからであつて、簡単な言葉だからではありません。それはちょうど、銃が投石機よりも、そして、刈り取り結束機が半月鎌よりも複雑であるのと同じことです。しかし、その難しさそのものによつて、フランス語の学習が人間の精神に対して教育的な価値を持つのです。文法と辞書は、語源と性と活用と統辞法を伴つて、あまりに特徴的で変則で、あえて言えば、意地悪に見えるので、強い注意力を持つてしかフランス語を正確に書くことができませんが、その注意力は人の精神にとつて有益なのです。フランス語を学ぶ人は、記念建造物やしきたりで一杯の町を訪れた旅行者が、一歩進むごとに目を楽しませ興味を掻き立ててくれる無数の思いがけない独特の細部に不平を言わないのと同じように、切り抜けなければならぬこれらの奇妙で興味深い出来事について不平を言つたりすることはないでしょう。また一方、フランス語はそれを学ぶ人それぞれにとつて、言葉の構成についての実地訓練でもあります。私どもの言葉で自分の言いたいことを正しく表現しようとする人が必ずしなければならないことは、文を構成することを学ぶことです。頭の中で主語や動詞や様々な補語の機能を正しく認識し、技師のように、主要な主張という堅固な柱身の上で丸天井のアーチのように支えられる付随的な様々な主張の力と重要性を計測することを学ばなければならないのです。フランス語は構成することを教えてくれます。というのも、思考を構成することを学ばずして文章を構成することは学べないからです。

さて、思考を構成することとは、実際にはそれを表現することであ



来学記念のサイン

「関西大学の発展と隆盛を心からお祈りいたします。

1922年5月27日 関西にて ポール・クロードル」と記す。

り、感性によって完全に受容できるようにすることであり、ちょうど諸器官が相互に援助し合っている人体のように、私たちの感覚と記憶が無秩序に提示する様々な意見を論理的で生き生きとした秩序の中に提示することであります。私たちの思想を表現することとは、私たちが作成した書類が世に出る一種論理的な存在に生命を与えることなのです。思想を表現することを通じて私たちは、いわば「それらの思想が創り出すものを見る」のであり、それらの思想が導く帰結や、要求する展開や、周囲に発生させる副次的な思想を表現します。表現の技術とは、知性の面に移された人生の技術なのです。いつの時代にあっても、偉大な文明が表現の技術を教

な文明が表現の技術を教養教育(liberal arts)の主要な目的にしてきたことは驚くに当たりません。というのも、例えば、医学は建築家の役には立ちませんし、化学は公認会計士の役には立ちませんが、しかし、説明する技術というものは、政治家であれ、医者であれ、技師であれ、軍人であれ、全ての人の役に立つからであります。そこで私の言いたいことは、説明す

る技術を完全に学ぶなら、フランス語の学習が、不可欠とは言わずとも、得難いものであるということなのです。

そういうわけで、私は日本においてフランス語の学習が若い学生を引きつけ続けていることを嬉しく思うのであります。私立の学校においても公立の教育機関においても、至る所でフランス語を学ぼうとする学生数が、かなりの割合で増加していると伺っております。また、最近、大日本帝国政府が、大学卒業や専門職につく資格取得の場合に日本でフランス語が被っている不公平な取り扱いをドイツ語と同等になるように改善する処置を講じたことを、嬉しく思っております。私は、このような動きが、これからますます展開してゆくことを願っています。皆さんが、フランス語を知ることが賢沢でエレガントで、何かの専門家だけに使用が制限されたようなものではなく、その大きな実際の価値以外にも、科学においても文学においても一般的な有用性を持ち、あらゆる時代における人類全体との優れたコミュニケーションの手段であると同時に、知性を養うための完璧な手段であることをご理解いただけたかと存じます。お話を終えるにあたって、非常に貴重で洗練された芸術と文化を持ちそれらを豊かならしめつつある大阪という日本のこの大都市において、フランス語の学習がますます広がり、双方の努力によって、ユーラシア大陸の大きさでさえ決して分かつことのできない二国間に、両岸から優れた知性が絶えず交流する橋をかけることができるよう切に願うものであります。

ポール・クロードル

(おく・じゅん 関西大学文学部)

SUR LA LANGUE FRANÇAISE

Messieurs,

Je remercie Monsieur le Président de l'Université de Kansai des paroles aimables qu'il vient de prononcer et de l'occasion qu'il m'a fournie de lier conversation dans ce lieu imprégné de traditions françaises avec des amis que m'a donnés non pas le hasard mais la pratique des mêmes études et des mêmes disciplines, l'usage de cette grande Ecole héritière des prétoires de Rome, où, suivant une belle expression, on apprend à *dire le droit*, et vous savez qu'on ne *dit le droit* dans aucune langue mieux que dans cette langue française où justesse est presque synonyme de justice.

Qu'attendez-vous de moi, Messieurs, vous qui êtes appelés dans cette énorme métropole d'Osaka au-dessus de l'énorme mouvement des échanges à maintenir l'idée sérieuse et harmonieuse de la justice sinon que je vous parle de la langue qui est par excellence celle de la raison, de la recherche et du jugement, celle que la première vous avez entendue pour les causes, les formules et les sentences? Et quel sujet d'entretien plus puissant pourrais-je avoir avec tous ces amis inconnus qui m'entourent, sinon de rompre entre nous ces barrières qui nous séparent, sinon de vous faire entendre l'appel de notre langue, de cette langue à laquelle il est si difficile, pour ceux qui en ont saisi les premiers mots, de refuser désormais l'oreille de leur intelligence? C'est donc de la langue française que je veux vous parler, de cette langue encore si insuffisamment étudiée et répandue parmi vous, malgré les efforts d'hommes admirables qui ont passé leur vie non seulement à l'enseigner mais à donner envie de la savoir. Mon dessein est de vous indiquer brièvement les avantages matériels et généraux qui résultent pour un citoyen cultivé de notre civilisation moderne de la connaissance de ce « parler visible », suivant l'expression de Dante, de ce langage par qui les idées deviennent visibles, par le moyen duquel il leur est comme naturel d'apparaître aux yeux de notre intelligence.

Sur les avantages matériels je ne veux pas insister longuement. Je vous rappellerai seulement que la France métropolitaine est un grand et puissant pays de 40 millions d'habitants, qu'en dehors de ses frontières plus de 15 millions d'Européens ou d'Américains parlent sa langue, qu'elle étend sa domination sur un domaine colonial qui compte 150 millions d'habitants. De ce domaine fait partie un magnifique pays tout voisin du vôtre et où l'étude de notre idiome est l'objet d'un véritable enthousiasme, je parle de l'Indochine pour qui le français sera bientôt la seconde langue nationale. Vous savez en outre que la France a une espèce de monopole des industries d'art et de luxe, que certaines industries dans leur état suprême d'avancement, et qui intéressent tout spécialement le Japon, comme l'industrie hydraulique, ne peuvent guère être étudiées que

chez nous, qu'elle possède sur son sol la presque totalité des minerais de fer de l'Europe. J'ajouterai que pour une grande partie du monde, pour l'Orient, pour toute l'Amérique Latine, la langue française est le véhicule indispensable du commerce et de la culture, qu'enfin, héritière privilégiée des idiomes antiques, elle est aujourd'hui pour l'Europe entière, surtout depuis que le monde slave y a pris l'importance que vous connaissez, elle est par excellence la langue FRANCHE, celle qui vous ouvre toutes les portes, qui vous donne la franchise et la bourgeoisie de tous ces lieux où par la délibération et la pensée se fait l'avenir d'un monde de travail.

Or, je n'ai pas besoin de vous en avertir, tout homme de nos jours qui aspire à ne pas être un simple rouage mécaniquement assujéti à la fonction qu'on lui assigne à remplir, a deux cultures à recevoir. La première est une culture nationale qui lui donne la connaissance de son propre pays, de sa vocation historique, de ses ressources et de ses besoins, de son corps et de son âme. La seconde est une formation internationale. Chaque pays est amené aujourd'hui à se rendre compte qu'il ne vit pas isolé, qu'il fait partie d'un vaste ensemble, et que dans cet ensemble il ne continuera à jouer un rôle important et honoré que s'il apporte de son côté des valeurs négociables, que s'il est capable de se faire comprendre, de participer à ce grand débat d'où sortent les idées, où deviennent conscientes les forces qui conduisent le monde.

Eh bien, je dis qu'à ce grand débat nulle n'a jamais été mieux adaptée que la langue française. On a dit justement que le français devait cet avantage à sa clarté. Et en effet le français est depuis longtemps une langue que j'appellerai codifiée, où chaque mot, éprouvé par une longue histoire, manié par une série ininterrompue de grands écrivains a reçu un sens enregistré et en quelque sorte officiel. Il est de plus, grâce à son système savant d'articulations, une langue souple, où l'idée principale peut se présenter avec son cortège complet d'idées accessoires, chacune à son rang et à sa place, suivant son degré d'importance et d'énergie affirmative. J'ai expliqué dans une conférence précédente que j'ai faite devant les étudiants de Tokyo, les raisons de cette perfection atteinte par le langage français et je crois l'avoir trouvée en montrant qu'elle n'était pas l'œuvre exclusive de ces inventeurs exceptionnels et isolés que sont les grands talents littéraires, qu'elle répondait à un besoin de la race, qu'elle était l'œuvre de la race tout entière au cours de ses générations successives. L'attitude naturelle du Français dans la vie est la discussion, il est naturellement juriste, son besoin en tout est de rechercher les CAUSES, et, si vous me permettez de jouer sur les mots, aussi de les plaider (puisque le même terme en français désigne la raison d'être d'une chose et la discussion devant la justice à laquelle donne lieu sa propriété). Tout Français a toujours eu l'habitude de parler devant un tribunal d'experts qui saura lui demander compte de chaque mot prononcé par lui.

Une seconde raison de la préférence qu'on donne au français dans les débats internationaux et qui est une conséquence de la première, est son caractère général et objectif. La plupart des

langues en effet sont fortement imprégnées par le tempérament natif des races qui les ont inventées et qui en font emploi. Elles n'expriment pas seulement des idées, elles manifestent une réaction physique de cette idée sur un type humain déterminé. Par exemple j'éprouve la plus grande admiration pour la langue anglaise, pour son énergie, pour son allure prompte et dégagée, pour ses PRISES rapides et simples. C'est la langue de l'action, mais ce n'est pas celle de la délibération. Chacun de ses termes est un acte plutôt qu'une conception. Pour parler anglais il faut se faire anglais, se plier à une certaine attitude d'esprit. Ce n'est plus l'idée qui s'exprime toute seule, ce n'est plus une proposition qui s'établit en quelque sorte devant nous comme un solide à trois dimensions, c'est quelqu'un qui s'en empare et qui s'en sert en vue d'un objet pratiquement déterminé. Dans le français au contraire tout est subordonné à l'expression de l'idée sous sa forme la plus objective et la plus abstraite. La phrase est un individu grammatical jouissant d'une vie autonome. Pendant longtemps l'idéal d'un bon livre en France a été un ouvrage qui en quelque sorte parle tout seul, dont on oublie l'auteur pour n'entendre que la pensée. C'est pourquoi les hommes des races les plus diverses se sont plu à écrire en français quand ils ont voulu donner à leur pensée une forme générale et définitive. De Brunetto Latini à M. d'Annunzio en passant par le roi de Prusse Frédéric II, par les Anglais Hamilton et Beckford, la liste des écrivains étrangers de langue française est longue et brillante et elle n'est pas près d'être close.

Vous voyez en somme par ce que je viens de dire que si le français a un titre à devenir une langue auxiliaire universelle, c'est parce qu'il est le mieux approprié, le plus subtilement construit pour ce rôle délicat entre tous qui est l'expression des idées, c'est précisément parce qu'il est une langue savante et non parce qu'il est une langue facile. C'est ainsi qu'un fusil est plus compliqué qu'une arbalète et une moissonneuse-lieuse plus compliquée qu'une faucille. Mais par ses difficultés elles-mêmes l'étude du français a pour l'esprit une valeur éducative. La grammaire et le dictionnaire avec ses étymologies, les genres, les conjugaisons, la syntaxe, présentent tant de particularités, d'anomalies et, si j'ose dire, de malices, qu'il est impossible d'écrire le français correctement sans une attention soutenue dont l'esprit ne peut que profiter. De tous ces accidents curieux et intéressants au milieu desquels il a à se débrouiller, l'étudiant ne se plaindra pas plus que le touriste dans une ville pleine de monuments et de traditions, ne se plaindra de ces mille détails inattendus et pittoresques qui à chaque pas amusent son regard et raniment son intérêt. D'autre part, le français est pour chacun une leçon pratique d'architecture verbale. La première obligation pour un homme qui a la prétention de s'exprimer correctement dans notre langue, c'est d'apprendre à construire une phrase, à bien se mettre dans la tête la fonction du sujet, du verbe et des divers compléments, à mesurer comme un ingénieur le ressort et la portée des différentes propositions incidentes qui viennent s'appuyer comme les courbes d'une voûte sur le fût solide de la proposition principale. Le français apprend à construire, car il est impossible d'apprendre à

construire une phrase sans apprendre à construire sa pensée.

Or construire sa pensée, en réalité c'est l'exprimer, c'est la rendre pleinement accessible à la sensibilité, c'est présenter dans un ordre logique et vivant, comme un corps où les organes se prêtent une mutuelle assistance, les notions que nos sens et notre mémoire nous fournissent confusément. Exprimer notre pensée, c'est donner la vie à une espèce d'être logique auquel notre papier fournit carrière. En exprimant les idées nous les expérimentons en quelque sorte, NOUS VOYONS CE QU'ELLES FONT, les conséquences qu'elles entraînent, les développements qu'elles exigent, les idées accessoires qu'elles suscitent tout autour d'elles. L'art de l'expression est un art de la vie, reporté sur le plan de l'intelligence. Il n'est pas étonnant que de tout temps les grandes civilisations en aient fait le but principal d'une éducation libérale. Car la médecine par exemple ne sert pas à un architecte, la chimie ne sert pas à un expert-comptable, mais l'art de s'exprimer sert à tout le monde aussi bien à un homme politique qu'à un médecin, qu'à un ingénieur, qu'à un militaire. Et ma prétention est que pour apprendre complètement l'art de s'exprimer, l'étude du français est précieuse, pour ne pas dire indispensable.

C'est pourquoi je me réjouis de voir au Japon cette étude attirer et retenir de plus en plus l'attention de la jeunesse des Ecoles. Partout, dans les institutions privées aussi bien que dans les établissements publics, on me dit que le nombre des candidats à la connaissance du français a augmenté dans des proportions considérables. Dernièrement j'ai appris avec plaisir que le Gouvernement Impérial avait pris des mesures qui tendaient à réparer l'inégalité de traitement dont notre langue souffrait au Japon et à la mettre au point de vue des diplômés universitaires et de l'accès aux carrières libérales sur le même pied que l'allemand. J'espère que ce mouvement ne fait que commencer. J'espère vous avoir convaincus que la connaissance du français est non seulement un luxe, une élégance, une curiosité d'usage restreint réservée à quelques spécialistes, mais que, en dehors de sa valeur pratique qui est grande, elle avait une utilité générale, aussi bien dans les sciences que dans les lettres, qu'elle était l'instrument le plus parfait pour la formation de l'intelligence, en même temps que le moyen de communication par excellence avec l'ensemble de l'humanité de tous les temps. Laissez-moi en terminant exprimer le vœu que dans cette métropole du Japon, qui conserve et qui enrichit ce que son art et sa civilisation ont de plus précieux et de plus raffiné, l'étude du français se répande de plus en plus et que grâce à des efforts communs nous réussissions à construire entre nos deux pays que la largeur d'un continent ne suffira jamais à séparer un pont sur lequel ne cesseront de passer les meilleurs esprits de l'une et l'autre rive.

出典：『千里山学報』第2号、1922年7月

再録：Paul Claudel, *Supplément aux œuvres complètes, volume 2 : Conversations politiques et littéraires*, Lausanne, L'Age d'homme, 1991